祝 創立四十周年

――追憶のままに――

田賀龍彦

昭和四十一年六月一日に発足した「法華経文化研究所」が今年四十周年を迎えることができたことを寿ぐと同時に実に感無量のものがある。法華経を所依の経典とする日蓮宗の檀林に端を発する立正大学に、昭和十九年に「宗学研究所」が設置され、戦後新制大学に移行して仏教学部が発足してから昭和二十九年に現在の「日蓮教学研究所」と改称された。学内で仏教関係の研究所としては唯一のものであった。檀林よりはじまった本学には日蓮教学関係の資料は当時充分に揃っていたが、法華経関係のものは充分とはいえなかった。特に原典関係のものや、欧文のものが不足していた。曾ては見たい資料を入手することが困難で、大変な思いをした記憶がある。当時、仏教学部長であった坂本幸男（日深）教授は本学に法華経研究の中心の施設を設けたいと考えられた。その頃の本学の状況は経営的にも決して楽なものではなかった。戦後の財政危機にはじまり、設備投資や、更に熊谷に新校地を求めたことなどから、経営的には困難を極めた時期であった。このような時に新しい研究機関を創設するということは論外のことであったと思う。かかる環境の中で坂本先生をかりたてたものは何だったのであろうか。昭和三十九年には東京オリンピックが開催され、世は大きな経済発展の波に乗っている時であったが、それに反して精神的荒廃はますますはげしいものとなっていった。経済的物質的発展に酔いしれている時に、先生は現在のような狂乱世界の萌芽を感じとっておられたのであろうか。このようなことも研究所設立の原動力の一つであったのではないか。特に法華経の「開会」の精神が仏國土の建設、真の平和な世界、新しい精神文化の形成に必要不可欠なものと考えられたのであろう。そうでなければ極めて困難な環境の中で研究所の創設を意図されたとは思われない。この研究所の設置に関して大学からの援助は望むべくもなかった。そこで先生は宗門をはじめ、法華経を信奉する教団や研究者の方々に理解と協力を求めて、多くの人々の賛同を得ると同時に設立の為の資金の援助を得たのである。坂本先生でなければ不可能なことであったと思う。先生は初代研究所長を務められた

が、昭和四十三年四月には立正大学長に就任され、学生運動のはげしい困難な時の大学運営に献身された。このようなご苦労もあってのことと思われるが、昭和四十八年二月七十三歳をもって逝去された。坂本先生あっての研究所であったが、第二代所長には中村瑞隆教授が就任された。大学は学部増設等によって財政的には徐々に好転してきたが、同時に仏教色、宗門色を無くそうとする動きが一層強まってきた。仏教関係の研究所が二つあるということで風当りがより強くなっていった。当初は外部からの寄附によって賄われてきた運営費も、その頃には大学学園の経常費と宗門からの補助金によって運営されることになったことも研究所の存立を問題視することに力を与えることになった。歴代の所長はじめ所員、宗門関係の方々の努力によって現在まで守られてきたというのが実情である。

研究所はその目的として、広く世界に法華経の資料を求めて整理・研究すること。その資料を多くの研究者の利用に供すること。法華経に関する資料及び研究成果を出版すること。とある。その目的に従って、多数の資料を蒐集し、それを「法華文化」及び「法華文化研究」に掲載紹介してきた。研究成果も法華経研究叢書として多数出版されている。

この四十年の間には鬼籍に入られた方々も多い。創立当初の顧問・参与をお願いした先生方十九名もすでに逝去され、所員・特別所員の中、十五名の方々がすでに亡くなっている。代わって当時若手だった方々が今や長老所員として活躍されている。正法華経研究会（主任野村耀昌教授）やネパール本研究会（主任松濤誠廉教授）は学内で研究会をすることもあったが、学内では長時間全員が揃っていることが難しいので合宿をすることになった。数日間の先生方との生活は大変勉強になった。ネパール本の合宿のあとのことだと思うが、塚本啓祥教授との話の中で「梵文法華経写本集成」がはじまったものと記憶している。その後、中村瑞隆教授・塚本啓祥教授を中心に十二巻が出版刊行された。更にそのローマナイズ本が第二巻まで刊行されたが、何分にも時間を要する仕事であり、担当の先生方もそれぞれに多忙となり継続が困難となったことは惜まれる。

研究所が四十年の区切りを迎えて一層の飛躍が望まれる。きびしい環境の中で困難なことと思うが、坂本先生をはじめ多くの先輩が守り育んできたのであり、今や世界的にも法華経研究のメッカである当研究所を失うようなことがあってはならない。

四十年間に多くの資料や文献が蒐集されている。今後これらの文献目録の出版と法華経研究史の出版が切に望まれるところである。